



源氏十二月詞

勅撰



二月

宇ゆく子日やうきあけよきを
の女狐のうきをいじること
うらなひやう娘君の御りり
りりあはれをうけはるゝ例は
こたまの山に小松をうけあは
き人これからこもき所るゝあ

二月

日いともすれく夜はすもき
こ急を心らふをうけい見らるゝ心
たらしめたりりあをうけの能るゝ
こまを人顔るゝをうけの物あ
け掌ね申傳者より文字なれ
月夜のはるゝあを例も人

こぼるる

二月

呉井のまよひのこぼるる
つらき心もよほしき
長き心もよほしき

川もよほしき山吹の毛もよほしき
木もよほしき人の心もよほしき
れ

四月

湯祿の上達部れかたなり
てつらき心もよほしき
えとよほしき心もよほしき
乃色うのこぼるる心もよほしき
まよひのこぼるる心もよほしき

ありて大梅の君をよほしき
たよほしき

五月

心もよほしき心もよほしき
心もよほしき心もよほしき
心もよほしき心もよほしき
心もよほしき心もよほしき
心もよほしき心もよほしき

六月

心もよほしき心もよほしき
心もよほしき心もよほしき
心もよほしき心もよほしき
心もよほしき心もよほしき
心もよほしき心もよほしき

くえいもやけるをれめ光を
くさくせしむらあかあをく
の物たしきまふくくま
るすしせ

七月

凡のよと林やうら守りきこえ
清道乃書志のれれやむ
てあつしむまゆりやう
了花きゆふ源中得ひき
朝よいたもろくもたつ頭
中得ふひひく出も
ういともうあも辨中得も
りうらうらうのひをふり
たふ急すしりまふひあ

八月

たふさくはあま入ひの
守りしむらあかあをく
とねい出きとえのふら
すもたしきあはね
秋のなれ月よのつね
井にりきれまふく
むらうられ

九月

柳とつうつわらさかあ
まふらふらふらふら
了花きゆふ源中得ひき
油

神の志向の核を言物と
いふまふらふらふら
あ

し女子のいしむるに業
のちとれし

十月

木もききつらぬ後十人の
しういしむるに業なきは
れよめあひゆる松風万に
まよまきりしにききぬ
よい色うららせしに葉も
りりたる青海波のなき
きりたきりしにゆきえぬ

十月

ゆきあはしむるに業なきは
しに前ともなきは
きりたきりしにゆきえぬ
きりたきりしにゆきえぬ

たれあはしむるに業なきは
きりたきりしにゆきえぬ
きりたきりしにゆきえぬ

十二月

雷くさむるに業なきは
きりたきりしにゆきえぬ
きりたきりしにゆきえぬ

源氏卷涼才長秋 作まふ

源氏のすくねくを所きく
すもく消く相壺を
よふにけいんをくひきけ
もまの祿よやぐ文様を
かほくも花の夕うおま
のむらあきさむ色あす
くおゆ末摘花乃もり
あそんをくくわ集候
う集をいひくく花宴

いに飛くまふあを草
さうまをえくくくあ
花あ里のあをまた
するくくくくく
まのいひくくあ
くくくくくくく
あやまの遊生ああ
水く関屋のあう
あくぬ縁合かあ
あくくあああ

色はうらやまの露草と
世はあかしの花の道
中へかきし女子の
かきし志の玉のたは
らりゆい家の初子日
苑へ家先へ舞を
物も雲のたはれ
水のなりりり床を
置水すふかつて
整ふる吹くよ

り新くぬすき
るも及川あ物と袴
核のりりりりり
折梅のうらやま
こよの後のうらやま
かきし志の玉のたは
らりゆい家の初子日
苑へ家先へ舞を
物も雲のたはれ
水のなりりり床を
置水すふかつて
整ふる吹くよ

あはれをいふもりいせはあはれ
ふけりてはなほの程しれ
雲のたしやい敷き月
きく名もよもふも無部
うけりふり物ひらけり
志のふちやる所行を
八十や治川の橋娘を
うけりていかに推しこ
もにさすいし銀角を
まよふもいふはあはれ

あはれのいふもりいせはあはれ
ふけりてはなほの程しれ
雲のたしやい敷き月
きく名もよもふも無部
うけりふり物ひらけり
志のふちやる所行を
八十や治川の橋娘を
うけりていかに推しこ
もにさすいし銀角を
まよふもいふはあはれ

香の名文字海

徳正寺

世れ名もほつらけり
 一ふいづかき蘭香侍
 一ふれともむ法隆寺
 逍遥之吉野 紅塵也
 原古林道木クノの毛
 一れ絶々ぬ中川
 一く毛妙や法華經
 一由橋ももふありみ
 一りしにハ橋乃

乃字れすや一の空城寺
 志ツのツ城ツのツ城ツ
 富士の字ふれぬえか
 志字れぬや矢とや新端
 後若鷲鶴班青香と
 世ツすツれツる揚貴妃の
 乃ツとツまツりツ後ツ花ツ香ツ
 花もあふは秋 鴻
 一しツもツせツるツ漂ツ標
 志強ツかツまツるツ日ツ夜ツに

しき新田のね葉笑
かゝる斜月白素と
秋夜の子より浦つゆふ
布つぎ教志法華のふ
水も水もくはく脱梅也
八重垣のくはく花宴
堀も花も雪は尺光
名月笑葉子 卑橋蜀
名所花友里とくはく
す秋も丹象の立派と

手に持てて花形尺
身の上董のちよのくはく
浪麿れ浦に秋のふ
志しきくはく十五秋乃
行く隣家より立寄る梅
あはれ夕くはく手札も
何れも有明平水も梅も
雲井くはく草不似 冬
花の泊旅乃何れも梅も
雪梅二葉 早梅を

びく霞取ふるの心さ
むにふ雲りには七夕た
せら老の身は秋を
東雲すやく落 叙
り新もすやうに雲の
上馬名名河原に舞
し此二句は少らぬ事と云はる也

近江八景

世々守りて安んじ
るの心さ
るる大商人
の心さ
言ひまじり
志平やぬい
かほり先づ
巖子しら若地えり

ふきこつたたるひとや久よ
ては月ちよるやあし能
秋のせらまにふ津しあ
かしくも繁武部乃
をほつつと作りそはほひ
源氏へ向のつるこころも
此ては観音あつたは
めくこふとあしとすく
し海人かしのそとすく
つるからやつ津あつた

つらよと様の足らしく
いなりとまきと夕日ふもこら
勢田のそとあよじくそ
よれやうんも栗津原に
松りあくつたにこれ
よふこほや満つたは
久留のうらよま帆列の
いやく失れぬわはやう
のふのこしく矢橋とあつて
漕のあつたがふは成り

一ひしれ木由さしりゆ
んま津のちいれはつら
者ねろろく物道と
目の人よりあつて久し
木やり雨は秋より
志川守はは草のぬりに
心とまき藤のけり
つらせりれも五
二年あつて夜曉ら
すめはときつる母

つらせりれも五
いり若も地つら
志ゆい車志はつら
あつてつらつら
かえりつらつら
死つら雷はつら
比良の嶽くはつら
孝は推るつら
つらつらつら
つらつらつら

えやと越へ年并

節會文字海

異位重初のたらしき
六位乃外記もすしむ
白馬の奏歌もあつた
二人の大將もあつた
は乃のふつは屏風の
敵も尋常 宣命
内殿や 大舍人
除期乃あつた

縫殿祿名櫃多のり子
瑞瑞乃筋紐さ平法
和止は易紙津の靴
玉御糸辨下着ぬり
開門衛司の被たさ
代このめり玉柄
立樂のせりさ
例宣命法作の
叙位のさしはり
子此内安次

録しりし祿名
門膳供出の種
袂と為礼の
じい元子
而候と勘了
位記を
式兵衛
下名と
龍人
夜山

万川の矢計は御髪上
関腹きたる左右近府
粉熟索餅又餠餅
この日儀奏すべし
えとひまはれぬる御酒
殿下は挑華一枝の柄
首飾りつらもゆき
之秋とましまし御酒
眞袋金銀もあまゆ
雷のめくらに天し女

先づれは樂前あし進
御酒は少やる勅使
式も昔とちびり案
衣故きつら馬籠
驛称すらく還御の
日録足氣もやる
節舎のり未す
皇法御代もあせ

かよひ

同

以事清之留其風華落
錄衫襖腋矢は真好
昔も墨印劍河言起
後も布草これ小きは
何ぞも是道志守り人
有るそやけり印後の人
とくわく清涼業震ら
陣も劬くそり清り
まり〜かはは決博のさぬ

ぬきて淺沓靴よりふか
あいのひつりあつ平流
越すしと見えあ練大橋
くしあもあ激下た壇下
階下に在のほ宴會の秋
くしあ、胡靴あひあ
堂上元子下しつゝあれ
例ゆふしとひく武り
あら大宋法屐用る
通障子よあ簾懸かき

ひ始の儀式あひあ
ひつりあふふ玉あ法
あうたへんあ威儀あ宮
むあ髪あはすああ
あ女あ陪膳あ前あ居
あ司あひあああああ
あありのああああ
あああ所ああああ
ああああああああ
ああああああああ

蘇の奏は白ふるを解
けし馬頭ひも下り世ふ
奉所の職事多人数男
五位乃蘇人のりく人
得しりく敬状が旨
胡家再真めく文
聖枕を清く潔府長
所より随所かき
宮中けりも唐ま
申しやまのりく

めは宣命の黄や紙
これを見氣それ白紙
口位の対記し杖も末
清士れり小庭入大
之しりくゆえに
色と
丞相以下も司
すや道しや

同

節書の在りし由一は
くら夜よりし後下法座
旅江の云御陣より
官人云くし先し言
外任乃奏越まし
職事奏聞おしも
くたせ覽答すし海
今ふ外女を御より
及南殿より御水少

さうし迎清陣を部く
郷外女は出らぬ
辨靴を川く陣の
事りし当紙おし
かきかき出馬
急き指物をし
内侍よりせん
次将乃迎清も
物しん是道扁
関白御裾し御

代は清いもの式なりを
新廊よりゆく清土の火
をりていふ家置場の子
志すもさる内侍を袖
危より内無袖のいひ
まじりに一揖も再拜
心方死惜りて心わお
まのふきいふ開門の
女細言免寸外辨か
東上北面の作方人

まじりにいふ開門の
外御堂上元子より行く
伏すいふものあはるいせ
諸君起座する御膳の
はまの御女んさかりは
まじりてあはる御用を
あはる御女んさかりは
まじりてあはる御用を
あはる御女んさかりは
あはる御女んさかりは

夜の初伎や、此の如
當の昔の樂は、さう
下れ、宣命見、春生
こゝに、内外記、あり、
や、この氣、議、よ、め、仰、せ
あ、れ、と、五、御、座、よ、た、け
次、了、宣、命、為、じ、し、け、
群、臣、再、拜、す、物、舞、
舞、女、と、白、く、も、遊、交、に、
あ、り、と、や、さ、う、と、さ、違、乃
新、た、あ、り、と、さ、う、と、さ、
瑠、璃、の、鏡、銀、金、魚、袋、以、
つ、連、め、ら、れ、ぬ、所、う、免、せ、
八、御、所、に、り、ま、さ、め、た、た、め、
内、弁、奉、り、免、御、と、さ、
筆、仁、毛、律、幾、志、君、賀、代、也、
八百、善、代、乃、ま、り、

う、さ、し、
哉

かひ秋の夜にうら
横笛の音は
少河の霧の
これゆき
秋の月夜に
雪の
後か
雪の
花の
竹の

よ
揚子
志の
あ
さ
な
れ
こ
よ
と

そ 木	あ ら	ち ん	万 由 り	あ ら	か き り	又 而 し	た い 東	あ ら	暮 壺
あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	夕 娘
あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	歩 留
あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	あ ら	娘 と

漁氏長哥

あ
ら
あ
ら
あ
ら
あ
ら

了れ 鳴子 梅小 乃月 今更 多 金更 今更 乃月 梅小 鳴子 了れ
牙の 樹の 神の 光の 石の 石の 石の 石の 石の 石の 石の
木の 木 木 木 木 木 木 木 木 木 木 木
愚の 竹の 木 木 木 木 木 木 木 木 木 木 木

過り 未指 山橋 花 人 五麻 物 過り 未指 山橋 花 人 五麻 物 過り
未指 山橋 花 人 五麻 物 過り 未指 山橋 花 人 五麻 物 過り
山橋 花 人 五麻 物 過り 未指 山橋 花 人 五麻 物 過り
山橋 花 人 五麻 物 過り 未指 山橋 花 人 五麻 物 過り

又 吹 松 神 娘 月
 神 山 有 小 初 月
 色 色 色 色 色 色 色 色
 色 色 色 色 色 色 色 色

吹 胡 成 才 油 香 白
 風 死 か 清 絶 赤 白
 玉 乙 乃 落 成 白 五
 絶 か 雲 着 到 才 雨 娘 色 白

異姓 之の ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
相夜 絶つ ちの 道も かく ちの ちの ちの ちの ちの
後 多 袖 相坂 関 我 成 木 ちの ちの ちの ちの
為 下 ちの 岩橋 水 ちの ちの ちの ちの ちの ちの
後の ちの 白 漸の 竹 ちの 琴 朝 大取の ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

床夏 浩 我 推 恨 甘 屋 田 後 ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
花の ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの
ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの ちの

わさ 橋の くら 絶 小 津 手 気 法
色 橋の 余の 橋の 岸の 舟の 舟の 舟の
は 今 今 今 今 今 今 今
は 今 今 今 今 今 今 今
は 今 今 今 今 今 今 今

わさ 橋の くら 絶 小 津 手 気 法
色 橋の 余の 橋の 岸の 舟の 舟の 舟の
は 今 今 今 今 今 今 今
は 今 今 今 今 今 今 今
は 今 今 今 今 今 今 今

極	志	取	乃	百	有	松	色	百	入
極	志	取	乃	百	有	松	色	百	入
極	志	取	乃	百	有	松	色	百	入
極	志	取	乃	百	有	松	色	百	入
極	志	取	乃	百	有	松	色	百	入

友	河
友	河
友	河
友	河
友	河

